

NPO 法人

第51号

芦安ファンクラブ通信

南アルプス地域の自然を愛するすべての人達に対して、地域の人々との交流を通じた南アルプスの環境保全及び適正利用に関する事業を行い、もって、南アルプス市芦安地域の活性化に寄与する。～芦安ファンクラブの理念～

特定非営利活動法人芦安ファンクラブ 事務局 南アルプス市芦安芦倉 1589-8 大滝要造

TEL 055-288-2531 FAX 055-288-2533 HP <http://ashiyasu.com> Mail afc3193@nusne.jp

塩沢久仙さん 瑞宝章受章！ (芦安山岳館館長/NPO 芦安ファンクラブ副会長)

2013年秋の叙勲で、塩沢^{ひさのり}久仙さんが瑞宝単光章を受章されました。山岳指導員として50年にわたり登山者救助に尽力されたことが受章の理由とのこと。塩沢さんは2007年にも藍綬褒章を受章されています。長年にわたる地道な活動に頭の下がる思いです。塩沢さん、おめでとうございます！では、塩沢さんより一言！

山岳遭難救助で受章しました。

四季折々の素晴らしい自然の営みを繰り返しながら、甲府盆地の西部に、その山なみを屏風の如く連ね、強い季節風を遮り、人々の暮らしを優しく見守ってくれている南アルプスは、1964年6月1日に国立公園に指定されました。そして、秋には東京オリンピックが開催され、日本中が活気に満ちていました。その年は私にとっても、山岳遭難に対する心構えが確立できた記念すべき年となりました。

3月、当時の小笠原警察署より連絡があり、春休みを利用して北岳に向かった早稲田大学理工学部山岳会のパーティーが、頂上から吊尾根分岐に降りる途中で滑落したので捜索に協力して欲しい旨の連絡を受けました。何をかおいてもと早速装備を整え署にいくと、学校関係者や当時目覚ましい登山を实践していた松島利夫氏（現在も活躍中）率いる「モダンクライマーズクラブ」の面々が詰めかけていて、小笠原署の山岳遭難救助隊と故深沢^{ひさみつ}今朝光氏（当時北岳稜線小屋管理人）、それに私を含めて捜索隊が編成されました。

捜索隊は、南アルプス林道の深沢下降点から当時の池山小屋管理人深沢義盛氏が拓いた「義盛新道」（現在のあるき沢登山口から池山小屋～吊尾根ルート）を登り、北岳稜線小屋に一日で入りました。捜索は翌日から開始されました。好天に恵まれ懸命に捜索し遭難者を発見しましたが、遭難者は岩と雪の急斜面での墜落ですでに命を落としてしまっ

塩沢 久仙

ていました。遺体は吊尾根分岐に安置され一夜を過ごし、翌日下で待つ家族と悲痛の面会となりました。大勢の悲しみの姿を見ていて、こんな悲劇を二度と起こしてはならないと思いました。以後山小屋の管理人として山で生活するようになって、安全登山の確保を最優先した管理運営を目指して頑張ってきた原点がこの遭難にありました。

このときを契機に小笠原警察署管内で起きた大部分の山岳遭難事故にかかわり、怪我や病気の人には、その苦しみを早く解放されるよう、また不幸にも命を落とした登山者に対しては早く家族の元に返してあげたい一心で活動してきました。そしてそのことが評価され、今回の受章となりました。また、このような活動は決して私独りでできるものではなく、関係機関や、大勢の志を同じくする仲間達との共同作業でありました。

国立公園となった南アルプスはこの50年の間に、南アルプス林道の開通及びマイカー規制、各種自然保護に対する法的整備やトイレの改善、山小屋の再整備等安全登山や自然保護に対して着実に進化しています。しかし、そこに人間が係わる以上、不注意や判断ミス等で山岳遭難ゼロにはならないかもしれません。それでも、この受章を機に、心新たに、それを目指して警察や地元それにたくさんの仲間達と活動してゆく所存であります。

ライチョウ会議に思う

芦安ファンクラブ 清水准一

第14回ライチョウ会議が、平成25年11月3日～5日にかけて南アルプス市榎形生涯学習センター「あやめホール」で行われた。

第1日目はワークショップ（研究発表・意見交換会）が行われ、2日目はワークショップの後、公開シンポジウムが開かれ、高円宮妃久子様の基調講演の後、静岡大学理学部特任教授の増沢先生がコーディネーターを務めるパネルディスカッションが行われた。3日目のエスクカーションは榎形山トレッキングルート周辺での自然観察を実施し、高円宮妃久子様がお出掛けになり、野鳥観察や白根三山の景色をお楽しみになられた。周辺のハイカーにも気軽に声を掛けてくださり楽しく充実した大会が、晴天続きの中で無事に終了した。



ご講演される高円宮妃殿下

ライチョウ会議は生息する地域で相互に交代しながら開催している。当地南アルプス市では、合併後すぐの8年前に芦安地区芦安小学校体育館で行われた。やはり裏方は芦安ファンクラブが務めた。大変楽しく務めさせてもらったと言った方が正直な感想だ。合併後、はじめての大きな大会への関わりに南アルプス市関係者や私たちは緊張しながらも、わくわくしていた。それは今回お見えになった高円宮妃久子様が非公式でおいでになるからだった。しかも前夜祭でのお食事会にも同席され、翌日の眩しいようなスマイルでの基調講演に、関わった人すべてが魅了されたのだ。

しかし当時の会議の内容は、「鳳凰三山のライチョウは絶滅した」とか、「鳳凰三山最後のライチョウ」などというパネル写真まで飾られる始末だった。パネラーとして何とか「絶滅」を「激減」に訂正してほしいと哀願したことを思い出す。

それから8年。鳳凰、薬師岳～観音岳周辺で近年目撃情報が増え、昨年から今年にかけて繁殖も確認されている。時間の空いた冬季に何回か姿を拝みたくて入山したが、その都度いく通りもの足跡しか確認できなかった。しかし、こんな嬉しいことはない。鳳凰のライチョウが復活したのだ。未永くお住まいになっていただきたい。



鳳凰のライチョウについて語る小林珠里さん



昨夏30年ぶりに繁殖確認された鳳凰のライチョウ(長谷川文さん撮影)

白根三山には9か所の「ナワバリ」しか確認されていない。最近の調査の結果だそうだ。長年調査を実施されてきた中村浩志信州大学名誉教授は、乗鞍岳で実証したように白根三山でもケージでの保護が必要なほどになっていて、絶滅の危機だとはっきり言う。またしても「絶滅」である。しかし今回は前の時ほど能天気には考えられない。環境省は昨年、近い将来、野生での絶滅の危険性が高いとされる「絶滅危惧ⅠB類」にライチョウを指定した。では、こんなに多くの関係者が危機感を表明しているのに地元ではどうだろうか。「ライチョウは見たことがない」「ライチョウが生息するような高山は行ったことがない」「ライチョウはあまりきれいじゃない」などと、あまりいい反応でもなく、興味も薄い感じだ。立山の室堂や乗鞍岳のように、南アルプスでは容易に見ることはできない。だから、奥深い山だからこれまで自然環境が保たれてきた。たとえ多くの人知らなくても生息が保たれていた状況が地球的な時間の中で近年まで続いてきたわけである。この変化は環境破壊だねといっても、もう耳慣れた言葉になってしまった。



パネルディスカッションのパネリストの皆さん

温暖化、異常気象、獣害、植生の変化など、これらのすべてが環境弱者の生息を脅かしていることになる。そしてこの環境変化がライチョウの天敵を増やしていることになる。調査によると最も生存率が下がるのがヒナの時期だそう。原因は降雨と気温の低下であるとの研究発表だった。梅雨時を生き延びたヒナたちを連れて稜線を散歩している母ライチョウは大変なご苦労されて、我々に愛らしい姿を見せてくれていたのだと思うと改めて保護の必要性を痛感する。

数チームが入山し同時に数か所の生息域を調査することによって、よりリアルな感触がつかめる可能性がある。まだまだ計画も煮詰まっていないが、過去に何度も調査に関わっている南アルプス市みどり自然課の広瀬氏に指導を受けたりデータを共有してもらったりして成果を出したいと思っている。ライチョウ生息のプロセスの一片として、この活動を地元で実施することに意義があるはずだ。



実行委員長の村山さんあいさつ

終わりに、今大会の準備から実施にかけて献身的に関わり、大きな仕事の事務方として奮闘された塩沢副会長他山岳館の職員の皆さん、南アルプス市観光課の皆さん、そして芦安ファンクラブの皆さんに感謝の拍手を送らせていただきます。お疲れ様でした。



多くの方に来場いただきました



司会の清水秀美さん

ライチョウ会議が終わり、感じたことは、「研究者の危機感をいかに多くの人たちが共感できたのかな?」「真剣にみんなライチョウを守って行こうとする契機になったのかな?」「研究者の自己満足的な発表会に終わらなかったのかな?」そんなことが脳裏をよぎると同時に、「ではご自分は何をしていますか?」であった。地元で山に明け暮れる1人のライチョウファンだけではないのか。「かわいい、かわいい」と写真を撮りまくっているだけではないのか。手をこまねいているだけでいいのか?

「何かしなくては」の気持が一つの提案を導いた。繁殖箇所数の確認である。地元で自然保護や適性利用に向けて活動を続けている芦安ファンクラブの仲間と「ナワバリ確認調査」をしたい。このメンバーなら出来るはずだ。

定例会では賛同する声が多く、地元としての立場から研究者任せにはしておけない責任と気迫が感じられた。



受付では女性陣が活躍



熱き思いを語る清水圭一さん



まぶしい笑顔に魅了されました!

芦安「輪かんじき」復活！！

—芦安伝統の「輪かんじき」をもう一度—

昨年の3月から始まったこのプロジェクトも、数多くの困難を経てようやく一つの形になりました。

2013年12月14日、芦安山岳館に於いて「輪かんじき製作体験会」を開催しました。当日はファンクラブ会員に加え、一般の方にもご参加いただきました。曲げたヒノキの枝とミズナラの爪材を加工して組み合わせるといって、たったそれだけの作業にもかかわらず、丸一日を費やしたのです。昼食もそこそこに作業に没頭した皆さん。先人たちの苦労を実感した一日となったようです。

「芦安の今昔」輪かんじきの作成

まだ寒い3月、山深い伐採地域から桧の枝を1人50本のノルマを課せられ汗をかきながら拾い集め、二宮金次郎の様な姿で車まで下ろしました。

次は、拾った桧をドラム缶で煮て曲げる作業ですが私は仕事の為当日の参加者に託したのです。が、1日抜けた穴埋めには、過酷な仕事が残っていました。かんじきの爪になるミズナラを背負いに行く仕事が残っていました。

雨の降る中、雨具を着て夜叉峠に向かい、山の神の手前に待っていたのは何と、60キロの丸太でした。

アルミの背負子に縛りつけたものの一人で立ち上がる事が出来ず両脇を抱えてもらいながら立ち上がり登山道をゆっくり歩く事が出来ず、走るように降りてきたものです。



以前に何本か下ろしておいてくれた人が居て、何とか、足りるだろうとの事で1回の運搬で免除になりましたが…。腰にきた～♪

伊井和美 (芦安ファンクラブ)

皆さんに作ってもらうために事前勉強をすることになりましたが、これまた重労働であり寒くて…。腰にきた～♪拳句の果てには完成間近で折れてしまい挫折です…。

が、当日前に少しでも作業工程を見ていたせいか作業当日は経験者と言う事で参加者の指導役に回り、またしてもマイ輪かんは作れず1日が終わってしまいました。

皆さんとても苦労していたようですが、大変楽しく良い経験が出来たと喜んで居ました。しかし実際雪山で使うのは心配との事で出来上がりに自信のある人はあまり居なかったようです。

芦安で昔から作り使われていた輪かんじきの技術は素晴らしく、見習わなくてはなりません。今ではアルミの輪かんじきが市販されており昔の古き良き物が無くなりつつあります。そんな中で、今回少しでも係わりが出来た事で先人達の苦労がほんの少し分かった様な気がします。

1つの工程に参加出来なかった事がとても残念ですが、今後もこのような形で芦安ファンクラブのコンセプトである「芦安地区の地域振興」に、微力ではありますがお手伝いしたいと思います。



今回は会員プラス一般参加者 10 名で。



出だしは順調だったのです…。



実は麻ひもで結ばれていた依田ご夫妻♪



図面通りにやってみるものの…。



花岡会長！さすがの集中力。



最も苦勞した(苦勞をかけた?)堀内さん。



慣れないので難しいですね、奥山さん。



あ、岩井さん珍しく手が動いています☆



宮下さんと清水さんも苦戦中!?



五十川さん悩んでいますね～。



齋藤さ～ん、ホントに自分で作ったの??



顯慈さん、レクチャー係お疲れさまでした！



見た感じはバッチリです！！



“マイワカン”にご満悦の依田さんと花輪さん



最後に記念撮影！まだ途中の方もいますが…頑張って完成させましょう！！
さて、なんとか無事に出来上がった輪かんじき、実際に使えるのでしょうか？参加者の皆さんは、一様に不安を口にしていました…。輪かんじきは実用品ですので、やはり使ってみなくては！ということで、このプロジェクトはまだ進行中です。今後の展開にご期待ください！

【連載】私と「山」と

山を愛し、山とともに人生を歩んでいる井口功さんインタビューも第3回目となりました。
今回は1993年、中国青海省の山、アムネマチン峰(阿尼瑪卿)6,282m登頂のお話です！！

〈今回お話をうかがうアムネマチン登山は、山梨県山岳連盟として初めての登山ということですが。〉

そうです。この登山は、山梨県山岳連盟として組織的に取り組んだ、初めての登山でした。アムネマチンへの派遣が決定したのが1991年12月、僕らに参加者募集の知らせが来たのが1992年の夏、そして出発したのが1993年の7月21日でした。その前の準備段階から考えると、3年近くの準備期間を経ての登山だったわけですね。やはり海外の山となると様々な準備が必要です。アムネマチンは中国の山ですから、中国へ登山申請をしたり、装備を準備したり、合宿をしたりいろいろありました。

〈どんな登山隊だったのですか？〉

総勢20名の隊です。そのうち15名が登山隊として、あと5名はサポーターとしての参加でした。僕は当時48歳。最終的に登頂できたのは、僕を含め6名。遠征期間は1993年7月21日～8月21日の1か月間でした。



登山隊の仲間と共に
(中列左から2番目が井口さん。後列一番右が深沢さん)

- 7月21日 出発
- 25日 シャンハーロン川キャンプ地(3,900m)
- 29日 ベースキャンプ設営(4,714m)
- 30日 キャンプ1設営(5,060m)
- 8月4日 キャンプ2設営(5,550m)
- 7日 1次アタック隊2人が登頂(6,282m)
- 8日 2次アタック隊4人が登頂(井口さん含)
- 10日 C2、C1 撤収 14日 BC 撤収
- 21日 甲府到着

〈この写真はすごいですね。氷河ですか？〉



C1 上部にて

ええ、そうです。これは、C1 からC2へのルート作業をしているところですね。キャンプを設置するためには、こんなクレバス帯を通過していかなければならなかったんです。クレバスの深さは30m以上あったと思いますよ。



アムネマチン主峰を望む

〈怖くはなかったのですか。〉

怖いというのはなかったですね。ただ、高度があつて空気が澄んでいるからか、遠くのものが見えて距離感がつかめなかった。すぐそこに見えているのに、ちっとも辿り着かないんです。

〈そんな苦労があつて、登頂になるわけですね。〉

登頂までで印象に残っていることを聞かせてください。〉

今回は未踏ルートからの登頂を目指していたので、ルート工作がとても大変でした。僕はベースキャンプ(BC)からキャンプ1(C1)までのルートを作り、次にC1からC2へのルート工作もしました。だからやっぱり、第1次アタック隊に指名されるのを期待していたんです。でも、翌日がアタック予定日という日に、隊長からお前は荷上げ隊だと言われたんです。僕は、何度も何度も「本当に僕には明日のアタックはないんですね。」と確認しました。それでも隊長は「ない」と言ったんです。

〈それは井口さんにとってとても悔しいことだったのでは?〉

まあ、それはそうですが…。僕は登山隊として出かけているわけですからね。登山隊では隊長の指示のもと、その時々のローテーションや隊員の体調でアタック隊が決まります。全員が無事に下山するためにも、隊長の判断には従うのが鉄則ですから、仕方ありません。

〈それでは、リーダーの責任というのもとても大きいのですね。〉

そうです。登山隊では、みんなに信頼される強力なリーダーがいなければ決してうまくいかない。アムネマチンでも三枝隊長がいたからこそ、こんなふうに成功したんです。

〈井口さん自身は第2次隊での登頂でしたね。〉

はい。C2に荷上げをした後、C1に下りてきた夜は、やっぱり悔しくて。心の中で「ちくしょう!」と思っていた

わけです。僕にはもう登頂の機会はないかもしれないと思いましたから。でも、翌日に運良く第2次アタック隊に指名されました。せっかく下りてきたのに、また登るのか、とは思いましたが、やっぱり嬉しかったなあ。僕は、本当にラッキーでしたね。



ナイフリッジを進む

〈アタックは無事に?〉

ええ。自分がルート工作をして張ったロープを頼りに登っていくのはとても感慨深かったです。山頂はとても広かったですね。



山頂にて (左から2人目が井口さん)

〈その他にアムネマチンでの思い出はありますか。〉

はい。ブルーポピー (青いケシ) に出会えたことです。もう、ずっと前から見たいと思っていたので、本当にうれしかった。その時のことは、報告書にも載せています。

「あつた」。それは岩くずの間に3つの花をつけ、かれんに咲いていたのだ。思わず息を止め、その花に見入った。花の位置まで顔を下げ、本当に青いケシの花であることを確認した。喜びが胸のしんの方から大きくなるのが分かった。叫びたい衝動をぐっとこらえ、胸の中へぐんと押し込んで、にんまりと1人喜んだ。その花びらはさながら花嫁の被るベールのように薄く透き通っていた。



〈報告書も大変立派ですね。〉

やはり、岳連として初めての海外登山ですからね。この報告書の編集に携わったのが、ファンクラブ会員でもある深沢健三さんです。彼は記録係としてこの隊に参加しました。深沢さんがいてくれたことで、こんな素晴らしい報告書を作ることができたと思います。

〈深沢さんは山梨日日新聞社の記者ですから得意分野ですね。記者から見た視点でもぜひお話を聞いてみたいです。〉

ええ、ぜひそうしてください。地下足袋の話、とかね(笑)



テントでくつろぐ (一番右が井口さん)

今回も素晴らしいお話を聞かせていただきました。最後の“地下足袋の話”が妙に気になります…。乞うご期待♪

紅葉の甲斐駒ヶ岳満喫！

平成 25 年 10 月 5 日～6 日、今年度最後の登山教室が行われました。今回は新築されたばかりの長衛小屋に泊まり、翌日甲斐駒ヶ岳へのアタックとなりました。紅葉真っ盛り、快晴無風という絶好のコンディションの中 20 名の参加者の皆さんとともに楽しい登山ができました。参加者からの声をお聞きください！

「雲上散歩」

今年も楽しみにしていた秋の登山教室に参加させていただきました。

初日、色付き始めた南アルプス林道を通り北沢峠。座学では塩沢館長にお話をいただきました。仙水峠付近の独特の地形、ホルンフェルスというんですね。岩の層に何千年もの歳月が刻まれているとのこと。また竹澤長衛氏と小屋の歴史など、館長ならではの興味深いお話をたくさんいただきました。新長衛小屋は新しい木の香りが心地よく、地元豚を使った食事も美味しく快適でした。今回のように混雑を避けて是非利用したいです。



永盛綾乃（東京都）

二日目、甲斐駒登山。仙水峠までの森と水の道、急登の後の稜線からの眺め、砂浜を登るような頂上までのラスト、甲斐駒登山は本当に変化に富んでいます。なんと言っても天気がよく、仙水峠からの雲海は神々しくさえありました。頂上直下の登りは苦しかったですが、頂上でも雲海と名山の数々を見ることができ感動。頂上付近で倒れていた石碑（？）を皆さんで直す一幕もありました。お弁当のあと、楽しくお話ししながら下山。終始雲海と紅葉を眺めることのできた今回の登山、素晴らしかったです。

一緒に登山させて頂いた皆様、スタッフの皆様、いつもありがとうございます。南アルプスをこんなに知ることができるのも、登山教室のおかげです（ヨイショっと）！

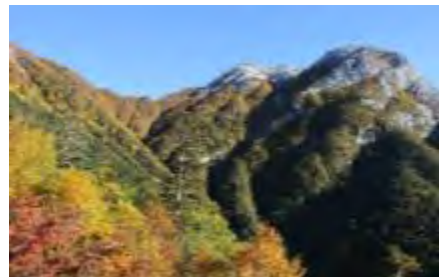
「山に感謝を」

快晴の中での修行に耐えた者への賜物としてありがたく頂戴した甲斐駒ヶ岳登山、これがあるからやめられません。

日本では人は平野に住み、神は山に住むとされ、山の恵で生活する種族（山窩・マタギ）と、神との中継役の山伏のみ入山が許されました。入山期間や、川や湖・滝での禊により身体を清める等厳しい掟が定められていました。山伏の寺である私が住む甲府市愛宕山の中腹からは甲斐駒、鳳凰三山が眼前に在り、季節毎の姿を眺め育ちました。あの山頂から甲府盆地を見下ろしたいと登山を始め、自身の能力開発と自然への感謝の為、登拝の掟を守り修行を行ってきました。高齢による事故の心配から単独登山を控えるよう家族に止められ、今回の甲斐駒登山に参加させて頂き

鈴木賢浄（山梨県）

ました。登拝修行以外の団体登山はあまり経験がない為、同行者からの山への思い等大変勉強になりました。山頂では、先人が苦勞して担ぎあげた石仏が台座から落ちているのを見つけたリーダーの掛け声で、参加者の奮闘により台座に戻し、揺らぐ隙間に硬貨を供出した女性、皆様の協力により石仏が微笑んでおりました。日程が合えば次回からも参加させて頂きたく、楽しい山旅が出来たことを主催者を始めリーダー、同行者に感謝申し上げます。合掌



参加者の小林圭一さん(埼玉県)より二編の詩を寄せていただきました。

十月六日

蝉は去り コウロギも去り 金木犀の香
空冴えて 星満天に密 長衛小屋

甲斐駒ヶ岳

富士は雲上 北岳碧空に映
鳳凰は瑠璃 朝日朝霧紅黄の奏
甲斐駒凜として聳え 希求